

「咽頭食道憩室に対する経口内視鏡的憩室中隔筋層切開術(Z-POEM)の有用性」

昭和大学江東豊洲病院 消化器センター

島村 勇人、木村 隆輔、角 一弥、池田 晴夫、鬼丸 学、井上 晴洋

咽頭食道憩室は、嚥下障害や誤嚥性肺炎などの症状を来す比較的稀な圧出性憩室である。本邦では主に外科的治療が行われるが、欧米では近年、内視鏡的憩室形成術が行われている。また、経口内視鏡的筋層切開術(POEM)の技術を応用した経口内視鏡的憩室中隔筋層切開術(Z-POEM)の有用性が報告されている。今回、我々は咽頭食道憩室に対してZ-POEMを施行したので、欧米で広く行われている内視鏡的憩室切開術の方法も解説しながら、Z-POEMの症例を提示する。

症例は40歳代女性。数年前より食べ物のつかえ感、咳嗽が出現した。前医にて頸部食道憩室を指摘され精査加療目的に当院を紹介受診した。食道造影では頸部食道に前方側方圧出型の28×18mm大の嚢状に突出したバリウム貯留を認め、上部消化管内視鏡では食道入口部直下の前壁側、10時方向に食残の貯留を伴う憩室を認め、Killian-Jamieson憩室と診断した。有症状であり、Z-POEMを施行した。粘膜下局注後、長軸方向に粘膜切開を行い、粘膜下層にスコープを挿入した。粘膜下トンネル内で憩室中隔を形成する筋層を直視下に切開を施行した。粘膜切開部をクリップで閉創し、処置を終了した(図1)。合併症なく、術後4日に退院した。術後2か月後の上部消化管内視鏡及び食道造影検査では、憩室は消失しており症状改善も維持していた(図2)。

咽頭食道憩室の治療法としてZ-POEMは選択肢の一つであり、有用性に関しては症例を集積して検討を重ねる必要がある。

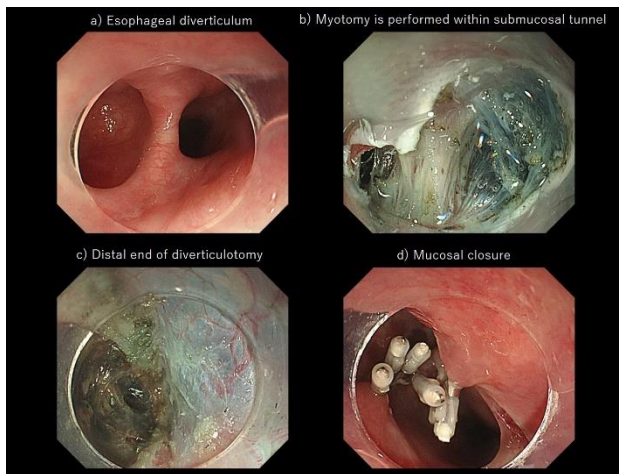


図 1

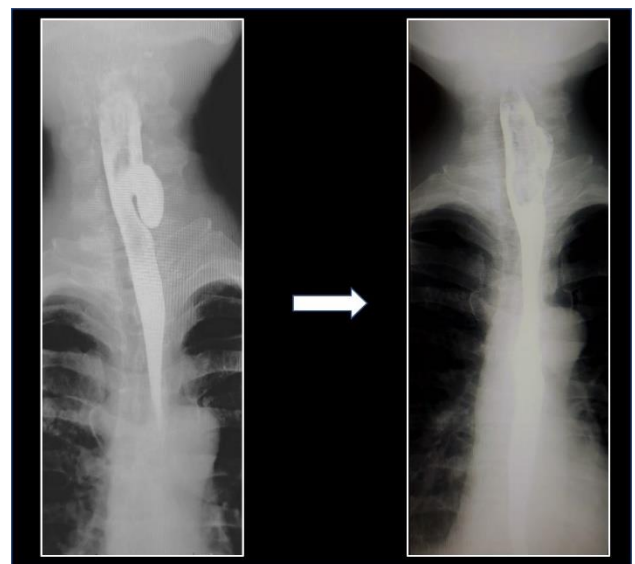


図 2